

☆海外渡航状況☆

◇第5部 田中 尚助教授は昭和33年11月10日より米国アカデミー客員研究科学者として、ブラウン大学において構造力学に関する研究に従事していたが、35年6月20日帰国した。

◇第2部 大島康次郎助教授は、日本学術会議より選出されて、モスクワにおいて開催される国際自動制御連合主催、第1回国際自動制御会議に出席、ならびに欧州各国において自動制御研究上の諸問題について連絡協議のため、昭和35年6月22日よりソ連および欧州諸国へ出発した。帰国は7月30日の予定。

◇本所所長 福田武雄教授は、日本学術会議より派遣されてストックホルムにおいて開催される第6回国際橋梁構造工学会議に出席ならびに欧州各国において橋梁構造学研究上の諸問題について研究付議のため、昭和35年6月24日スウェーデン、西ドイツへ出発した。帰国は7月14日の予定。

☆人事異動☆

◇第4部 加藤正夫助教授は、教授に昇任した。(1960.4.1)

☆受賞☆

◇第5部 田治見 宏研究員は、「耐震理論に関する基礎的研究」により昭和34年度日本建築学会賞を受けた。(1960.5.27)

☆観測ロケット実験予定☆

ロケーンは、10月に青森でシグマ4型による観測実験が計画され、その予備実験として、7月1日～4日の間

に茨城県谷田部町館野の高層気象台構内を放球点として行なわれる。この予備実験は、バルーンの種類と設計法ならびにコマンド操法に関するテストで、ロケットは用いない。コマンドは、テレメータによるバルーン切離しでこの結果を見て、10月の実験に利用することが計画される。

カップ8型は、さきに2段ロケットのメインをダミーとして実施したので、今回は、その結果から正規の2段式として実験が行なわれる。1号機は飛しょう実験に重きがおかれ、2号機は、イオン密度観測機として予定する。飛しょう期間は、7月10日～23日の間で、以後日程が順調に運ばれるときは、9月中・下旬の世界共同観測週間に、カップ6型・8型等で観測する予定である。

☆東京移転計画☆

◇本所の研究活動の面から、また教育活動の面からも、かねて東京地区への移転が教授総会で希望されていたが、昭和34年3月旧ハーディバラックスへ移ることが決定された。同所は港区麻布新童土町にあり敷地約56,200m²、鉄筋コンクリート建物約31,574m²で、同建物は物性研と併用される。

このため所内には、東京移転委員会を設け、その下に営繕、厚生・福祉、移転実施の各専門委員会を構成し、それぞれ分担の実施案を検討しつつ、昭和35、36年度において移転を完了する準備を進めている。なお計画、実施案など詳細は本誌11月号に発表する。

移転後の本所の立場は産業界や各種研究会・学会の中心に位するので、研究活動における従来以上の活発化や大学院学生・各種研究生の教育活動にも一そうの発展を期待している。

筆 者 紹 介

◇渡辺 勝 助教授 理博 専攻 応用数学
 ◇渡部 弘之 技官 専攻 同上
 ◇竹中 規雄 教授 工博 専攻 切削工作学
 ◇鳴沢 勇平 助手 専攻 同上
 ◇五十嵐 良 日本電気KK
 ◇野村 民也 助教授 工博 専攻 電気制御学
 ◇河村 達雄 技官 工博 専攻 パルス工学

◇野崎 弘 助教授 工博 専攻 応用電気化学
 ・応用光化学
 ◇藤代 光雄 技官 専攻 同上
 ◇山田 嘉昭 助教授 専攻 材料力学・塑性学
 ◇吉弘 芳郎 助手 専攻 糖化学・発酵化学
 ◇黒岩 城雄 助手 専攻 同上
 ◇中村 亦夫 助教授 専攻 同上

出版委員	委員	柴田 碧	委員	高橋 武雄	専門委員	星野 昌一
出版委員長	久保田 広	竹中 規雄	館 充	斎藤 成文		
委員	山田 嘉昭	* 浜崎 襄二	池辺 陽	玉木 章夫		
	大井光四郎	安達 芳夫	三木五三郎	編集室	下村潤二郎	
	* 橋 藤雄	山本 寛	(* 印当番委員)		水野 晴明	

第12巻 第7号

生 産 研 究

(本誌は生産技術研究所の研究紀
 介誌として、毎月1回発行する)

1960年7月1日 発行

頒価 60円 編集者 久保田 広
 発行者 福田 武雄

印刷所 三美印刷株式会社
 東京都千代田区神田多町2の7
 発行所 東京大学生産技術研究所
 千葉県弥生町1
 電話千葉(2)0261(代表)